

# リービ英雄における「台湾」

笹沼 俊暁

## 1 はじめに

リービ英雄は、アメリカ政府の外交官である父に連れられて台湾で5歳から11歳までの幼少期を過ごした。一九五〇年代後半から六〇年代はじめににあたるが、当時の台湾のようすは、リービ英雄の小説のなかでたびたび回想シーンとして描かれ、作品の中で重要な役割を果たしている。彼はエッセイで「自分の家はどこにあるのか、あるいはどこにあったのか、と聞かれたら、その島だ、と答えてしまう」と述べており、当時彼の住んでいた家のあった台湾の地方都市・台中は、小説中の主人公にとっての「家」として描かれている。作家としての成り立ちにかかわる位置を与えられているのである。

当時、大陸からわたってきた国民党の軍人たちは、「光復大陸」を夢見つつ台湾で長い第二の人生を歩まざるをえなくなっていた。また、台湾の地に以前から住んでいた内省人たちは、母語を抑圧され、強制的な中国化を余儀なくされていた。人々は、アイデンティティーの根拠となる故郷を喪失し、あるいは自分たちの生まれ育った土地ではなく遙か彼方の「中国」をアイデンティティーの根拠として押しつけていたのである。

リービ英雄にとって、台湾とはいかなる場所なのであろうか。なぜ彼は、台湾の家についてたびたび描くのであろうか<sup>1</sup>。

## 2 アメリカ人少年の家

リービ英雄の作品のうち、「星条旗の聞こえない部屋」「満州エクスプレス」（一九九六年）、「国民のうた」（一九九七年）、「天安門」（一九九五年）、「蚊と蠅のダンス」（二〇〇一年）、「ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行」（二〇〇二年）等が台湾の家について言及している。つまり主要な作品のほぼすべてであり、台湾の家のイメージはリービ英雄の多くの作品世界に共通して流れるライトモチーフといえる。

デビュー作「星条旗の聞こえない部屋」は、一九六〇年代末の横浜および新宿が舞台となっており、「国民のうた」は、アメリカのワシントンにある母の家に帰る

ときの話である。「満州エクスプレス」、「天安門」および「ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行」は、中国大陸の満州や北京、開封を旅する主人公を描いている。様々な土地をめぐる物語を紡ぎ出すリービ英雄は、まさに移動と越境の作家といえるが、日本、アメリカ、中国大陸といずれの地での旅を描くにあっても、台湾の家のイメージが回想として織り込まれているのである。

ではまず、デビュー作「星条旗の聞こえない部屋」を見てみよう。この作品は、主人公のアメリカ人少年ベン・アイザックが、アメリカ領事である父とともに住む領事館から抜け出し、新宿へと家出する話である。領事館の英語の領域から、日本語の海の中へ入り込んでいく様子がそこで描かれている。日が沈んでから領事館を家出し、新宿へと向かう電車の中で、窓から漢字のまたたきを眺めながら主人公は、幼少期の台湾に思いを馳せるのである。

「ベンは多勢の人に見つめられることになれていた。一九五〇年代、アメリカ外交官の息子として、幼児の頃から香港、プノムペン、台北など、数年あるいは数ヶ月ごとに家と国を変えながら、アジアの中に住む白人の子供として育った。

アジアにいる金色の髪の子は多勢の人の眼差しの中で育つものだ。市場の狭い小路を歩いていると、かならず付きまどってくる同い年の裸足の少年たちから「美国」とたたえられ「白鬼」と貶された。

台湾海峡の鮮やかなオレンジ色の夕焼け空の前で、誰も喋っていなかった。

風よけガラスの通って差しこんだ陽光が眩しかった。運転席にいる父の薄い頭髪を汗がさらに薄めるのを、ベンは見守った。

父はベンの知らない言語で囁きはじめた。中国語の方言だったのだろう。未知の音節と抑揚に伴って、父の腕は隣の座席にいる女の肩へやさしく動きだした。熱帯植物の大きな葉のように、ゆっくりと確かな動きだった。

ベンはその女をよく知っていた。父から彼女を「姐々」と北京語で呼ぶように言われていた。今、その「姐々」はちらっとベンの方へ振り向いたが、ベンの知らないあのことばで安心させられたのか、それきり見なくなった<sup>2</sup>。

こうした光景は、ベンの一生の中でも最も早い時期の記憶として描かれている。父に連れられて、幼い頃からアジアの様々な国々で暮らすが、どこに行ってもそこは彼にとって「異国」でしかない。台湾は、そのなかでも最もくっきりした「異国」の記憶の場所である。

また、主人公のベンの父親はユダヤ系であり、アメリカのマジョリティーを占めるキリスト教徒に対して軽蔑のこもった英語の呟きを漏らす人物である。かといって、はるかに年下の中国人女性と再婚したことでユダヤ人のコミュニティーからも追放されており、宗教を尋ねられて「うちは儒教です」と答える。さらに父が台湾で再婚する中国人女性は、ベンにとっては継母であり、しかも使用言語までもベンの母語とは異なっている。彼女にとっても母語は英語でも北京語でもなく上海語である。多くの人間にとって主体とアイデンティティーの根拠となるべき「家庭」そのものが、アイデンティティーの不確かな人々の集まりである。

ベンの追憶する台湾とは、そうした集まりとしての家族の記憶の場所といえる。そこは彼の主体の根拠というよりも、絶えざる移動とアイデンティティーの不確かさを端的に象徴する場所である。英語の領域から日本語の海へと飛び込むベンの移動・越境は、こうした原体験を背景とするかたちで描かれているのである。そして、一九九七年の「国民のうた」では、作者のリービ英雄の家が実際にあった台湾中西部の町・台中とおぼしき土地についての詳細な情報が書き込まれている。そこでは、彼の「日本語」とのはじめての出会いもがしめされている。

リービ英雄の文章は、移動と動きを日本語によって表現するところに特徴の一つがあるが、「国民のうた」もまた、移動の場面から始まる。ニューヨーク発のメトロライナーをワシントンD. C. で降りると、「かれ」は、ホームレスと政府の役人の「外人」だらけの地下鉄に乗り込んで母の家に向かう。かつて父と離婚した実母と共に暮らした家である。ベルを鳴らして家に入ると、「かれ」は、「もう日本語は通用しない」と日本語で考える。母は英語で語りかけ、一緒に住む知的障害者の弟は、英語になりきれない、言葉にならない言葉しか話せないからである。家の中で二人と言葉を交わすうち、かれの脳裏には「帰りたい」という日本語が鳴り響いてしまう。そして部屋にかかる、かつて台湾の家の父の書齋にあった山水画を見つめるうち、思いは子供時代に移っていく。

かれは、池と築山のある広々とした庭や靴を脱ぐための土間、タタミ部屋のある「日本人作的<sup>ルペンレンスオデ</sup>」家に暮らしていた。辺りは「模範郷<sup>モーファンシェング</sup>」あるいはModel Villageと呼ばれ、「<sup>メイグオレン</sup>美国人」の住むその家々は高い壁に囲まれていた。書齋では父を訪ねてくる国民党の老将軍たちや、<sup>ナショナルリスト</sup>用人の話す北京語が響き、書架には「大陸<sup>ダール</sup>」から来たという漢字の書物が置かれている。家の中では母の英語や弟の言葉にならない言葉も響いていたが、外では、彼にはわからない言葉—閩南語(台湾語)—を発する子供達が遊び、時折かれと弟を脅かした。

ここでは、幾重にもねじれ分裂した形で、主人公にとっての「家」あるいは「故郷」が示されている。通常、家や故郷は、人がそこに帰っていくべき懐かしく親密

な実体的な場所としてイメージされやすい。しかし、この主人公の「母国」であるはずのアメリカの家は、かれを温かく包み込むというよりも後ろめたさと悔恨を迫り、突き放し、戸惑わせるようなものとして描かれている。実母との関係はぎくしゃくし、知的障害者の弟は、親密な「家族」というよりはコミュニケーション不能の底知れない「他者」である。かれは「母国」アメリカの家に帰ってきたにもかかわらず、「異国」であるはずの台中の家について思いをめぐらしてしまう。

だが、台中の家とその周囲は、北京語や閩南語、日本語が交錯する、むしろより他者に満ちた空間である。家の周り高い壁で囲まれ、その土地に古くから住む人びとはと隔絶した領域となっている。台湾の人々から見ればかれは、異邦人でしかない。かれにとって人を突き放す場であるという点ではアメリカの家に劣らない条件を備えている。より人を突き放す場所に、主人公は家・故郷を見出す。そして、そうした場所において、かれは初めて日本語と出会ったのである。家の裏手の土蔵には「日本人」が残した筆筒や座布団などの家具などのほかに、古い雑誌やレコードが置かれており、元の持ち主の言葉を伝えていた。

父が<sup>ナショナルリスト</sup>国民党主催の宴会に出掛けて家にいない夜、一人で残った母がワシントンから持ってきたグレン・ミラーのレコードをかけていたプレーヤーからは、かれがはじめて聞いた、本物の「日本人」<sup>ルペンレン</sup>に違いないだろう、女の声が高まり、開いたガラス戸から流れこんだ光を受けて明るい「洋間」を隅から隅まで満たしていった。

みーなどのあかり

その声を聞きながらかれはぐるぐる回るレコード・ラベルの文字を、目で追おうとした。父の書齋にある書物の文字と同じ、しかしその真ん中にある「の」という文字が、一分間に七十八回も回っているのに、かれは目を離せなくなった。

支  
那  
の  
夜

目眩がするほどすばやく回る文字と、女の歌声。このことばが、今は自分の

家となったこの家の部屋という部屋に、そして庭を囲む高い壁にまでかつては昼も夜もこだましていた。そう思うと、今ここにいる自分と、自分が生まれる前にここにいた「日本人」<sup>ルベレン</sup>の間に、調和のようなものをかれは覚えた<sup>3</sup>。

作家・リービ英雄にとっての台湾とは、横浜の領事館の英語の世界から新宿の日本語の世界へと移動するさいの原体験を象徴する場であると同時に、彼の特殊な日本語との出会いの場でもある。他者に満ちた台湾の家で出会った言語である日本語だからこそ、かれはその言葉を使ってそこに「帰りたい」と洩らしたといえよう。

ここで気をつけておきたいのは、こうした台湾の家で出会った日本語が、かれの住んでいた家や家具等と同じように、持ち主を失った亡霊のような言語としてあったという点である。日本語で「帰りたい」と洩らしたとしても、その帰りたい家とは、日本語を発する「日本人」がいる場所にあるわけではない。彼にとっての家は、幼少期に暮らした台中の家である。そしてその家と直結する日本語は、実在の日本や日本人からは切り離されている。台湾で、日本語はかつての支配言語であり、土着の閩南語や客家語、原住民の言葉とは異なる、それ自体がくっきりとした他者である。このことは、日本語作家としてデビューしてからのリービ英雄が、多様な人種や民族を受け容れうる、普遍的な言語表現としての日本語の文学を繰返し主張することにつながっていったと思われる。

### 3 天安門と台湾

リービ英雄の作品に登場する台湾の家には、もうひとつ重要な役割がある。それは、中国と中国語にかかわる問題である。彼の家は英語に加え、日本語と中国語が交錯する場所としてあった。近代の台湾は地政学的にそうした交通の場所なのである。天安門事件後、中国の改革・開放路線が軌道に乗り始めた一九九〇年代から、彼はたびたび中国大陸を旅行し、その体験をもとにした小説やエッセイを多く発表しているが、中国と中国語について、次のように説明している。

西洋へ行っている間には一度も思ったことのない、「日本語を忘れよう」という危険な衝動にかられて、中国語の中へつ走り出した。一種の言語熱を出してしまったのである。その熱にかかっている間は、思いがけないイメージが訪れて、幼少期の記憶が「大人」として生きてきた四半世紀の時間を抹殺するように甦り、ときにはもう一つの言語、つまりもう一つの人格の中で生きてきた、あるいはこれだけおそい年齢から生きられるという妄想に走ったりする。

特に、この場合、母国語ではなかったのに母国語のように抵抗なく子供の自己形成に大きな役割をはたして、思春期を直前にしてとつぜん途絶えてしまった言語に、久しぶりに触れてみると、分らないようで分っているシンタクスと、それが導いてくるもう一つの感性にはばくはかなりの衝撃を感じた<sup>4</sup>。

幼少期に台湾で覚えた北京語の記憶が、四半世紀後に甦り、大人の彼にとっての新しい言語体験として衝撃をあたえたという話である。台湾の家は、中国と中国語に対する彼の視線の原点ともなっているのである。

デビュー作「星条旗の聞こえない部屋」には、すでにその問題の一部が描き込まれている。作品中で、主人公のベンベンの父は、上海語を話す外省人女性の貴蘭と台湾で再婚する。そしてさきに見たように、作品中には、かれと父、そして父の再婚相手が、台湾の浜辺でジープに乗って台湾海峡の海を眺める回想シーンが描かれている。海の向こうには、継母の故郷である中国大陸があるのである。

小説「国民のうた」で、幼少期の主人公が、家の中でしばしば北京語に接していた様子も、さきにも見たとおりである。子供ながらもかれは、「自分の家から一時間ジープに乗っていける海のかなたには、この島より百倍も大きな「大陸」が望める、そしてそんな「大陸」があるからこそ父が「この国」にやってきた」ということに薄々感づいていた。かれの父の書斎には、大陸からきた山水画が飾ってあり、本棚には「四書」「昭明文選」などの題字のついた本が並んでおり、子供のかれは父のいない間にその本を手にとって、縦に記される黒い文字の列を手で触れてなぞっていた。またその部屋に父を訪ねてやってくる国民党の老將軍たちは、四つの声調のある言葉でジョークをいい、「光復大陸」と叫んでいた。

そして、中国大陸と台湾の家の問題について、より深く切り込んだ作品が、一九九五年の小説「天安門」である。天安門事件の数年後に発表されたという時期的な問題性や、戦後日本文学で同時代の中国を描いた数少ない作品のひとつという意味でも重要な作品だが、こうした問題については後章で改めて論ずる。ここでは作品の中の台湾の位置について検討してみたい。

この作品もやはり、移動の場面から始まる。中国大陸へ向かう飛行機の中で主人公は、窓の外に夕日と毛沢東の横顔に似た雲の群れを眺め、子供の時に台湾で憶えた「ドンフワンフホンゴ タイヤンソイヤンソ東方紅太陽升」という歌を思い出す。また機内のスチュワーデスを見て、かつて父が再婚した黒髪の中国人女性を想起し、かれの思いは台湾での子供時代に遡っていく。

回想場面では、「日本人作的」庭付きの屋敷の中で、国民党の老將軍が叫ぶ北京語の「グアングフーダールー光復大陸」や、大陸を共産党に「占領」された国民党を助けに父が「その

島」にやってきたことに気付くなど、「国民のうた」とほぼ重なる内容の描写がなされる。ただ、「国民のうた」では台湾時代の主人公の脳裏の中国大陸のイメージが比較的断片的に示されていたのに対し、「天安門」ではそれにより詳しいディテールが与えられ、作品全体を貫くテーマへと発展させられている。

たとえば主人公は父と二人で地元の映画館へ映画を見に行く。はじめに「三民主義」の国歌斉唱があり、スクリーンには、彼らの家のある輝く島と、その隣に百倍もある暗闇に包まれた巨大な丸い陸の塊が映し出される。輝く島は小さな太陽となって大陸の暗闇に光を送っていた。そしてかれの眠りの前には、膨大で闇に閉ざされた大陸のイメージが出没するようになる。大陸には「マオ」という狂人がおり、自分の家のある「この国」にいつ襲ってくるかわからない「バケモノ」だった。

そして「天安門」の作中で重要な役割を果たすのは、主人公の父の再婚相手で、中国大陸の上海から来た外省人女性の「ミス・ジャオ」である。作中の回想シーンでは、初めてかれの家にやってきた父の浮気相手の黒髪の中国人女性と、かれが英語で言葉を交わすシーンが描かれている。主人公は、北京のホテルについて部屋でテレビを見ながら、その女性は、大陸からわざわざかれの家庭を破壊するためにやってきたような存在だったと回想するのである。

大陸の懐に戻った、一つの大民族。

最後には、団欒の中心に、幸せそうに孫を抱えるお婆さんの太った丸い顔が画面一杯に映る。南方の歌声が最高潮に達すると、大家族の面々の上に、

我是龍的伝人

という字が大きくかぶさった。

私も龍の伝人なのか、という日本語の聲がほろ酔いの頭の中で沸き上がった。画面の裏から自分のことをあざ笑っている声が聞こえている気がした。

「俺の家族はこんなじゃなかった」

とつぶやき、テレビの電源を切った。

音一つないシングル・ルームの中に座ってもう一度、窓の方を見た。他のネオン・サインが消えて、毛主席の遠い筆跡だけがカーテンにわずかに映っている。

一人で大陸に来てしまったと、また思い、そのままベッドに入った。島の家と、大陸を想像しながら、寝室から眺めていた夜の広々とした庭を思いだした。

少年時代に純金色の髪だった母と、青年時代に継母になった黒髪の女の、二つの姿が交互に浮かんだ。そして、まるでかれの家族を破壊するためであるかのように、黒髪の女を大陸から追放した毛主席の目、天安門広場の暗闇を見据えて、微笑みをたたえる、無関心な目<sup>5</sup>。

さきにも述べたように、リービ英雄の作中人物にとっての家とは、他者に満ちた空間であり、彼を突き放すようなものとしてある。そうしたかれの台湾の家の存立条件の元こそが、黒々とした大陸に住む「マオ」だった。そして、台湾の彼の家は、あたかも毛沢東がよこしたかのような中国人女性によって、よりいっそう他者に満ちた、突き放すような空間となる。

かれにとって中国大陸とは、中国政府の国策放送とおぼしき番組の映し出す調和に満ちた家族像とは正反対の、むしろ他者に満ちた空間としての家・故郷を作り出した元凶である。そして実際に訪れた中国の街も、かれにとって、他者に満ちた、突き放されるような場所だった。人々はつっけんどっけんて怒ったような口調で対応し、バスの運転手は乗客をどこに連れて行くか分からず、かれを恐慌に陥らせてしまう。だが、そうした場所こそ、かれは故郷を見出すのである。中国の中心ともいうべき天安門広場の毛沢東の遺体を目にして、かれは震える声で「マオ」と叫びだしてしまう。

中国とは、かれの台湾の家の存立条件の原点であり、台湾の家とは、かれにとっての中国体験の基点となる場所なのである。また、「国民のうた」の作中では、たんに主人公にとってわからない言葉として示されていた、村落の子供達の発する言葉に、「天安門」で、「外国人！<sup>ワゴラン</sup> 美国人！<sup>レゴラン</sup>」という、閩南語の発音を示すルビが当てられていることも重要である。これは、「我的中国」「延安」などのリービ英雄の後の作品で、中国語の多様性の強調につながっていくことになると思われる。さらに、「ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行」は、後に詳述するように、中国大陸に定着し中国人の名をあたえられたユダヤ人を探す旅に出る話であるが、そこでも台湾の家の回想シーンが挿入される。主人公の父が、周囲の国民党員たちから中国名で呼ばれていたことを想い出すのである。多様な他者を受け容れる中国の文化の雛形を、台湾での原体験に見出している。台湾の家は、他者に満ちた多様性の空間としての中国の、いわばミニチュアとしてあるともいえる。

#### 4 台中のリービ英雄

「国民のうた」等の多くの作品における台湾の回想場面は、一九五〇年代から六



〇年代初頭にかけてのリービ英雄の実体験を材料にして組み立てられたものである。彼が幼少期に暮らした台湾中西部の都市・台中の日本建築が、小説の主人公にとっての「家」として描かれている。では、当時の台湾・台中とは、どのような都市だったのだろうか。

現代の台中市は、人口一〇〇万を超え、台北、高雄につぐ台湾第三の直轄市である。台中市政府発行の『台中市史』（一九九九年）によれば、もともと原住民の平埔族が自給自足の生活をおこなっていたが、十六世紀頃から漢人、日本人、スペイン人、オランダ人の進入がはじまった。清朝に編入されてから漢人による移民と開墾が進み、原住民を土地から駆逐していく。この頃の漢人の開墾は屯田兵としての性格が強く、現代でも「北屯区」「西屯区」「南屯区」と呼ばれる地区名にその名残がある。一九世紀末には台中は中部最大の町へと発展し、一時は台中を台湾省都とする計画も立てられた。

本格的な近代的都市建設が始まったのは、日本統治下に入ってからである。台湾の南北を縦貫する鉄道の台中駅を基点として、その北西側に基盤の目のような計画的な市街地が建設された。台湾国家図書館発行の写真集『日治時期的台中』（一九九九年）を見ると、瓦葺きの屋根に電柱、日本語の看板という、戦前の日本の地方都市さながらの、当時の台中市街の様子がしのばれる。

市内には、現在でも植民地時代の名残をとどめる建物や古跡が多く、一九一七年に建てられた台中駅は、瓦屋根の中央に時計台のついたルネサンス様式の建物で、修復されつつ現在でも現役で使用されている。駅からタクシーで数分ほど北に行くと、台中公園があり、中には現在も、かつての台中神社の跡が遺されている。第二次世界大戦後に台中神社は破壊され、本殿の跡には現在、孔子像が設置されているが、参道や狛犬、石碑はそのまま、石の鳥居が地面に横倒しにされたまま保存されている。

こうした光景は台湾各地で普遍的に見られ、鳥居の一番上の横棒だけ取って後はほったらかしたり、石碑の文字の部分だけパテで埋めてあとはそのまま、などというパターンが多い。日本時代の神社や記念碑等を中途半端に壊して中途半端に残すのが、戦後の国民党のやり方だったようである。韓国であれば完全に破壊してしまうところだろうが。

日本統治時代に栄えた駅周辺市街のメインストリートを駅から北西の方角にしばらく進み、旧市街を抜けると、高層ビルが並ぶ現在の中心街にさしかかる。SOGOや新光三越などの日系デパートの周辺には、現在、日本人駐在員が数多く住んでいて、日本食レストランやスーパーが並び、ほとんど日本語だけでも生活できてしまう。大通りから少し横道に入ると、老朽化した日本式の家屋がビルの谷間に今でも

点在する。幽霊の出そうな廃屋と化した家も多い。このあたりはかつて、市街の中心からはずれた郊外にあたり、日本人の官吏等が住む宿舎があった。日本統治時代は「大和村」と呼ばれ、戦後には「模範郷」と呼ばれてアメリカ人が住むようになった。リービ英雄の台中の家があったとおぼしき場所である。現在でも、「模範街」という通りの名前が残っている。

国民党軍が台湾へと撤退したのち朝鮮戦争によって冷戦が激化すると、アメリカ政府は台湾支援に力を入れ、一九五〇年代に在台米兵は一人を越えた。さらにベトナム戦争が始まると、台湾は米軍将兵の休暇のための場所となり、最大で五十四万人にもよる米兵が台湾に滞在した。台中市内には清泉崗空軍基地（アメリカ軍はCCK基地と呼んだ）があり、米兵向けのPXや歓楽街もつくられた。

リービ英雄が台中で少年時代を過ごした一九五〇年代は、政治的な背景から言語的な錯綜が甚だしかった。台湾に古くから住んでいた内省人は北京語がまだうまく話せず、母語である\_南語や客家語、原住民諸語を公共の場で禁じられていた。一方、外省人たちもまた、大陸の各地から集まってきたため各地の方言しか話せない者が多かった。さらに、植民地時代に植え付けられた日本語もまた、人々の脳裏や私的な会話の中に強烈に残存していた。

禁じられた言葉としての故郷の言葉と、故郷の言葉を禁じられた者たちのたどたどしい言葉、かつて植え付けられた禁断の異郷の言葉、そして故郷を失った者たちの多様な言語が交錯する、複雑怪奇な状態だったのである。原理的に言って、完全に整合性のとれた単一のアイデンティティーをもつ人間などそもそも存在しないが、台湾に住む人々のアイデンティティーは言語のレベルから極端に混乱させられていた。

こうした言語状況は、戦後の台湾で生み出された文学にも色濃く反映している。日本統治下では、古典的な漢詩漢文、白話文文学、日本語による創作が併存していたが、戦時下の皇民化政策のもと、日本語による創作のみが許されるようになった。多くの作家は、異郷の言葉である日本語を通じて近代文学の表現を獲得したのである。しかし、戦後になると日本語による創作の道は閉ざされる。一部を除き、多くの作家は北京語での創作を断念せざるをえなかった。

当時の代表的な作家・吳濁流は、国民党政府に日本語による創作発表の場を継続させることを懇願したが、結局その願いは拒絶された。国民党による北京語普及政策が進められても、いったん身に付いた日本語での創作を北京語に転換するには極度の困難が伴い、内省人による北京語文学は、一九六〇年代以降を待たなければならなかった。また、外省系の作家の北京語文学はしばしば「眷村文学」「老兵文学」と呼ばれ、故郷を失った者の「望郷」や「流氓」「漂泊」がテーマとなることが多い。

外省人作家の代表格として知られる白先勇の短編集『台北人』には、大陸での過去の夢を追い続け慨嘆し、異境の地で老境を迎えた者たちの様々なようすが描かれている。リービ英雄の作品中でたびたび登場する国民党の老將軍たちの「光復大陸」の叫びは、こうした外省人作家の故郷喪失のテーマと共通する文脈を持つといえる。

作家・リービ英雄は、このように故郷を失い、あるいは否定され、アイデンティティーが引き裂かれた者たちに満ちた一九五〇年代の台湾で少年時代を送った。台中の彼の家は、そうした戦後台湾の独特の歴史性と社会性を背景としてはじめて形成されたものといえる。彼はエッセイで、台湾での少年時代を振り返って次のように述べている。

北京語は、ぼくがそれを覚えた台湾の言語ではなく、本質的には大陸の言語なのである。大陸を失った大陸人の亡命地となった熱帯の島で覚えた、内モンゴルに隣接する北部中国の言語は、それがぼくの身についた時点ではすでに「喪失された」言語であったわけだ。ぼくが覚えた中国語は、敗北者たちの中国語だったし、その敗北者たちが大陸の「回復」を夢見ながら住みついた島にとっては、おそらくは方言という以上に異質なコトバだったかもしれない(もちろん今の台湾はそうではなくなっただろうが、敗北者たちにとって「大陸」がたった六、七年前まで生活していた領域を指していた一九五〇年代はそうだったに違いない)。

母国語ではないのに、母国語を覚えるように「理解しよう」という意図もなく、他の言語に置きかえもせず、ただすなおに子供の頭に入ってしまった「外国語」。おまけにそんなことばを覚えてしまった島の、多くの島民にとって、その「国語」は「母国語」ではなかった。台湾語が母国語だったのである。北京語はかれらにとって、いったいどんなものだったのだろうか。もちろん、子供時代のぼくには、そんなことを察する手がかりは何もなかったし、多分、そんな質問自体も頭に浮んだことすらなかった。ただ、母国語の英語とは感覚的に同等だった北京語は、それを覚えてしまった環境の中ではかならずしも「当然」ではない、そんなことをぼくは直感したのだろう<sup>6</sup>。

故郷を失い、故郷を否定された人々が出会い、衝突する場で、少年時代のリービ英雄は日本語および北京語と出会った。中国大陸から来た人々にとって、北京語は、台湾の環境ではそれがもとももっていた土着性から切り離される。また日本語も北京語も、台湾の土着の人々にとって「当然」の言語ではなく、他者の言語としてあった。大人になってからの彼は、こうした場所で出会った日本語を使って創作活動

をおこない、また中国語そのもののありようを作品のなかで描いていく。リービ英雄にとっての日本語と中国語は、あくまでも他者をめぐるものとして使用され、描かれることになるのである<sup>7</sup>。

## 5 作家のふるさと

文学研究ではしばしば、作品中の登場人物や語り手と作家を混同してはならないといわれることがある。テキストは作家から独立した意味の織物としての側面を持つからである。だが、世界中の多くの近代文学—特に日本近代文学の私小説と呼ばれる領域では、読者はしばしば作中の登場人物や語り手を作家自身と同一視して作品を読む。書き手の側もまた、読者がそう考えることをあらかじめ想定して作品を執筆するのである。そのためそうした作品は、しばしば作家の他の作品や作家にまつわる様々な情報を前提としている。

リービ英雄の作品もまた、作中の登場人物をリービ英雄自身であると読者に思わせるように故意に書かれている。ほとんどの読者は、リービ英雄がアメリカ国籍の白人であり、外国語としての日本語で書く作家であることを情報として知っている。リービ英雄自身もまた、そのことをじゅうぶん意識し前提として作品を書いている。すなわち、読者は、リービ英雄という固有名が付された作品群および彼についての情報群によって構成される、全体としての「リービ英雄の物語」を読む。

そしてその「リービ英雄の物語」のほぼ全体に通底する、いわば結節点とでもいべき場所に位置するのが、一九五〇年代の台湾の地方都市の家なのである。そこで去来する人々は故郷を失ったり、アイデンティティーを分裂させられたりしており、主人公を突き放すような他者としてある。リービ英雄の多くの作品世界に通底する移動や越境、アイデンティティー喪失のテーマは、そこから生成してくる。彼にとっての日本語は、そうした場所ではじめて出会ったものだった。まさに「作家のふるさと」なのである。

坂口安吾のエッセイには、よく「ふるさと」の問題が出てくる。それは心温まる共同体的なものではなく、異質なものによって突き放されるような「交通空間」としてある。リービ英雄の描く台中の家は、まさにそのような場として描かれている。台中の家は、他者に囲まれた交通の空間である。

そして気をつけたいのは、現実の台中の街が、客観的な実体としてリービ英雄の「ふるさと」を構成するわけではないという点である。リービ英雄の作中の台湾は、つねに主人公の主體的経験としての回想の形で登場する。なるほど確かに現実の台湾社会にはクレオール的状况があり、多くの異なるルーツや言語をもつ人々が軒を

接して生活していて、リービ英雄の家の存立背景となっている。だが、現代思想や社会理論、文学研究によって「客観的に」把握されるものとしての多言語・多文化的状況の記述に「ふるさと」があるわけでない。また、台湾の多様な社会がそこに住む人たちにとって「ポストモダン的で素晴らしい」わけでもない。そこで「他なるもの」と出会い、突き放され、戸惑う主体的あり方に「文学のふるさと」がある。作家・リービ英雄にとっての台中の家とは、あくまでも彼自身の主体性を突き放すものとして「ふるさと」たりうるのである。

一九七〇年代以降の台湾の文学界では、「郷土文学」ということがさかんに議論され、台湾社会の現実に根ざした文学の必要性が叫ばれた。一九九〇年代以降になると、民主化を契機として台湾ナショナリズムが盛り上がり、台湾文学史の執筆や台湾文学全集の編集、大学での台湾文学コースや台湾文学館の設置などがあいついだ。あたかも明治期の日本でおこなわれた、「国文学」の創出(捏造)の再現のようである。台湾の多言語・多文化主義的な状況を、ポストモダン思想の借用から称揚し、「他者と共生する台湾人の包容力」などという論理でナショナリズム高揚の材料とすることもある。しかし、それはあくまで、共同体としての台湾を想像的な実体として構築しようとするものであって、多文化主義うんぬんはそれを補強する内部的装置としてある。そこで創出される「郷土」は、「文学のふるさと」と本質的に関わりがないように思われる。

## 注

- 1 リービ英雄についての先行研究としては、井口時男「越境=リービ英雄」(『國文學：解釈と教材の研究』一九九六年八月)、吉原真里「Home Is Where the Tongue Is--リービ英雄と水村美苗の越境と言語」(『アメリカ研究』二〇〇〇年)、青柳悦子「複数性と文学--移植型〈境界児〉リービ英雄と水村美苗にみる文学の渴望」(『言語文化論集』二〇〇一年)、陣野俊史「「その後」の戦争小説論(3)リービ英雄と山田詠美、「9・11」と砂漠」(『すばる』二〇〇九年三月)、永岡杜人「言語についての小説--リービ英雄論」(『群像』二〇〇九年六月)、中村三春「〈旅行中〉の言葉 Words on Travels リービ英雄と多和田葉子」(『層』二〇一〇年一月)等があるが、リービの台湾体験の問題について集中的に論じたものはない。
- 2 リービ英雄『星条旗の聞こえない部屋』講談社、一九九二年
- 3 同『国民のうた』講談社、一九九八年
- 4 同『久しぶりの北京語』(『アイデンティティーズ』講談社、一九九七年)
- 5 同『天安門』講談社、一九九六年

6 注4と同じ

7 戦後台湾における文学事情についてはすでに多くの研究がなされてきた。『台湾文學年鑑』（行政院文化建設委員會、一九九七年～）下村作次郎「日本における台湾文学研究」（『天理大学学報』一九九二年三月）、松永正義「日本における台湾文学の研究について」（同『台湾を考えるむずかしさ』研文出版、二〇〇八年）、佛光人文社會學院文學系所提供「中國大陸臺灣文學研究目錄」（[http://www.fgu.edu.tw/~wclrc/data\\_menu/Taiwan\\_Literature.htm](http://www.fgu.edu.tw/~wclrc/data_menu/Taiwan_Literature.htm)）等を参照。